

# 大学での五十年と留字という言葉

My Fifty-year University Career and the Word “Liuzi”

志村 和久

論文ではない文章を書いてよいということであるから、とりあえず自分のことを書こうと思う。

昔から、〈三十年を一世とする〉というけれども、私の生涯は、二十年きざみで進展したように感じる。また、一方では〈人生五十年〉ともいわれる。昔は四十を〈老〉とし、五十はもう死ぬ歳であった。私は未熟であるからスタートまでに二十年かかり、それから五十年、干支も六巡、今七十二にして文教大学を去り、これでこの大学の教員から大正生まれが全滅した。全滅はおかしいが、昭和生まればかりの若い教員集団となったのである。孔夫子の志学・而立・不惑・知命・耳順・従心というお話は、七十まで常に向上を期せられた進境と解し、〈川上の嘆〉も、悲観ではなく希望であるとする説に従えば、おそれ多いが孔夫子とわが身を 年の上からひきくらべて、にやにやしているのである。大学を退いて、今では各地の公民館の生涯教育講座を担当するに当たり、このような考えで「論語」の話も取りあげているのである。

まず、昭和二十年、二十歳。それが大学にはいった年であり、戦争が終わって、自由な本格的な学問の道へ踏み出した年であった。早くから中国文字学、つまり漢字の研究を志したが、縁あって中華学校の日本語教師となり、日常中国語を聞き話す身となった。そのうち、倉石武四郎博士からの御依頼で、中国人某先生の身辺の御世話することになり、某先生は私のわずかな援助を多とされて、その見返りのように徹底した中国語の指導の労を惜しまれなかった。一つは、陸志韋氏の「北京話単音詞」の研究で、

それは、のちに岩波の〈中国語辞典〉の基礎となった。二つめは、日本語の助詞の研究、三つめは、台湾の「古今文選」を用いた古典講読であった。とにかく終日、一対一で、徹頭徹尾中国語の生活であった。

当時、倉石先生は、東京大学教授と京都大学教授を兼ね、夜は日中友好協会の、中国語講習会で教えられた。そこへ習いに行った私が、先生の個人的指導を受けたのは、「説文解字」を卒業論文にしていたからである。先生は、一般に中国語教育の権威とされていたが、実は「説文」の深い研究をなさった方であった。先生は、大学の定年退職後は、私塾を建てたいとのご希望で、たまたま私が聞き知っていた箏曲の宮城道雄先生が建てられた住まいと稽古場の話を、興味深くお聞きになり、私がお伴して、あちこちと不動産物件を見てまわったこともある。それは、やがて今日の日中学院へと発展したが、講習会が友好協会から独立したとき、〈倉石中国語講習会〉と命名したのは私であり、私が当分の間、無給の事務員を勤め、さらに教壇にも立つ身となった。

ぴったり数字で切るわけにはゆかないが、次の二十年、三十代後半からは、東京教育大学、千葉大学で教壇に立つ身となった。千葉では、教育学部で小学校・中学校教員養成の中国古典学を講じたが、文学部併任教授となり、文学基礎論として文字論、比較文化論として日中比較文化を担当した。教育大では中国語を教えた。ところで、私の勝手な言い方をすれば、とかく文字学、ことに漢字研究というと、字体の変遷、字源の研究のようにとらえられ易いが、私が目ざしたのは、通時的研究に対する共時的研究であって、それを文字学に対して文字論と呼んだのである。

二十まで、四十まで、やがて六十のくぎりが来た。千葉大の定年は六十五であったが、たまたま文教大の文学部創設に当り、すすめられて定年を待たず移ることにした。この文教大は、その前身の、立正大学に教育学部が創設せられたとき、私は非常勤で来ていたのである。

立正の教育学部創設、文教の文学部創設、千葉大の漢文学講座開設、大学院の設置、文学部創設併任と、新しい出発に何度もゆきあたって、新し

い体験をいく度かしてきた。別に私が格別の仕事をしたわけではないが、今思えば、なつかしくもあり、またありがたいめぐりあわせであった。

めぐまれたと言えば、戦後すぐのころ、大学の先生が、自由に研究をはじめられたとき、ひどい食料難で、学生はほとんど出て来られなかった。そんなとき私は東京の者ということもあって、多くの先生の指導を一对一で受けられた。大学卒業後は、研究科（今の大学院）に籍を置き、自分の研究のかたわら、先生方のお手伝いをした。専任の教員となったのは、五年もたってからのことである。

まず、恩師諸橋轍次博士・恩師小林信明博士の私設助手として〈大漢和辞典〉（大修館）の編集に加わった。それより先、〈日本文学辞典〉（蒼明社）の仕事をした。それは山岸徳平博士担当の、鎌倉・室町文学や日本漢文の下請け執筆であったが、江戸文学の担当の守随憲治博士や浦山政雄先生から歌舞伎や日本舞踊の指導を受けたのである。別に、由良哲次博士から〈哲学辞典〉、原富男博士から高校国語教科書の編集のかたわら個人的に東洋倫理学の指導を得た。

もうひとつ、大きな仕事として、石橋犀水博士、尾上柴舟博士はじめ多くの書道大家のもとで書道の論著にかかわることがあった。かように書き立てれば、すべてその時の縁であったとは言うものの、まことにふしぎでもあり、ありがたくもあったが、盲人が蛇をおそれぬたとえのように、良くも各面に突き進んだものである。

外に出ては、文部省で、教育漢字筆順の手引きの仕事をし、法務省で、人名漢字増訂の仕事をした。ことに人名漢字は、民事行政審議会（民行審）といって、法務省の仕事だということは、あまり知る人が居ないであろう。筆のついでに書くならば、長いこと旺文社のラジオ講座に参加して大学受験生の指導に深く関係した。当時は、文部省にきつくならまれて、ずいぶんといやな思いをした。あれは、政治的なある団体が文部省を動かしたものであるらしい。今となっては、その対象がなくなり、時効でもあろうから、ここに書くのである。私としては、文教大に対していささか功ありと

せば、この受験界で、わずかでも名をあげたと思っている。後進の先生方にも、機会があるならば、未知の高校生に文教の名を知らせる方便を考えて、手をさしのべてほしいと望む。どんなりっぱな大学であっても、高校生から見れば未知の世界である。馬を育てたことがある。馬は食事の前にきまった量の水を飲ませるのであるが、馬を水辺までつれてゆくのはたいそう努力のいることであった。大学受験生を馬にたとえるとして、それも駿馬とか名馬だとして、とにもかくにも水辺につれて来なければならない。さまざまな方策を用いて、文教大を知らしむべきである。いっそ高校生のための一日大学を拡大して、本学独自の受験講座を開いてはどうだろう。

以上、見ようによっては、たくさん仕事をした自慢話に見られるかも知れないが、実はそうではなく、多くの良き師にめぐまれた幸せを書きたかったのである。その良師ということで、いまひとつ角度をかえて言えば、古典芸能の世界があった。これは全く趣味というか、道楽というか、これまた、ふしぎなめぐりあわせと言う外はない。私は、十代から、能謡・狂言、歌舞伎・日舞、浄瑠璃に親しんだが、何せ戦争の激化とともに手も足も出せなくなった。戦後、大学生となって、余暇どころか、学業の時間まで割いて劇場に通い、ことに浄瑠璃（義太夫節）は、師匠の出稽古も仰いだ。音曲でも舞踊などでも、素人の稽古は、どんな器用な人であっても、素人、所詮〈だんな芸〉にすぎない。玄人の仕込みとは違うものである。けれども、私は全くの偶然から玄人にまじって舞台に坐ることとなった。当時全くの人材不足から、はじめはただ並んでくれればよいという甘言に乗せられたのである。しかし、いったん舞台に並び、しかもお金をいただくとなれば、生半かなことではすまない。そこで玄人の稽古を仕込まれるハメとなったのである。今では、国立の養成所から若い人材が育ったので、もう我々の出る幕はないが、ずいぶん多くの師匠に仕込まれ、多くの舞台を経験した。

そもそも手ほどきは、二世豊沢団七師である。この師匠は「義太夫年表」にも載っているが、初代団七師の孫であり、伯父にさの太夫・湊太夫、初

代の兄に古団九といった義太夫一家であり、初代は〈やかまし屋の団七〉と呼ばれ、「義太夫大鑑」にその稽古のきびしさが伝えられている。また谷崎潤一郎が「春琴抄」の中に引用したことでも有名である。二世団七は、まことにおだやかな町のお師匠さんであったが、若いころは弥七師の預り弟子で、京都の竹豊座などに出勤している。御子息は、皆芸の道に進まなかったので、私を芸の上の子供として育て、三味線をはじめ、諸道具から譜本に至るまで、すべてが私のもとに伝えられた。類を呼ぶ友のようにして、他界する玄人・素人が、見台だの肩衣だの、多くの品々を私のもとに寄せられるようになった。

義太夫などの古典芸能は、今でも昔ながらの伝承である。市販の教本はない。師匠について一曲ずつあげてゆく。声楽であっても、録音で独学したのでは真に迫ることはない。ましてや器楽は、一对一の稽古によるしかない。それでも玄人は譜本を作った。これを〈朱〉という。五線譜に採れないこともないが、議論の余地はあるものの、やはり便利なものは古来の〈朱〉である。

私の手元には、三味線もたくさんあるし、見台・肩衣はじめ諸道具がいっぱいある。けれども、それらを置いて、最も珍重するのは〈朱〉である。〈朱〉は三味線弾きの心覚えで、中には表紙に〈覚〉と記したものもある。手ほどの団七師のものばかりでなく、他の師匠のものもいくらかある。これを見くらべると、特に古い（大正期）ものは演劇・音曲の常として、比較検討の対象となると思われる。先述の通り、〈朱〉だけでは本物は弾けないけれども、素人の趣味としてならば、〈朱〉と録音で何とかならないものでもない。現に長唄や民謡では、市販の譜本がたくさん出ていて、デパートや楽器店で買うことができる。義太夫の譜本も、わずかにサワリ集が市販されたが、今では皆無に等しい。私の手元にあるものは、玄人にも役立つであろうし、上演を知らない珍品もある。有名曲目は、素人の教本にもできる。私は、この宝を持ちくさらせないように、早く整理したいものだと思っている。

文教大を去るころは、図書館長となった。そのころ、しきりと学生に聞かせた言葉は、〈眼福〉であった。図書館は、深い研究をするところでもあるが、また入門としては、好奇心をかきたてるところとも思う。つまり、美術館・博物館の縮図として図書館を考えたいと思ったのである。さまざまな図書・文物を陳列し、いずれ種切れかと思う一方、結果的には、あれもこれも見せたかったものが、たくさん残ってしまった。大学に言い残すことがあるとすれば、この一事のみである。他は多くの有能な教員・職員が、きつとうまくやってくれる。私の口を出すことは何もない。ただひとつ、学生の足を図書館へ向けさせること、高校生に、さあいらっしゃいと迎え入れる一つのくめだま〉と、あれこれ考えて、ぜひ図書館の展示室の充実を考えてほしい。それが、全国の他大学図書館に誇れるような収蔵を考えて、常時特別予算をつけてほしいと思う。

むかしむかし、中国語を学びはじめたころ、中華学校の黒板に、校長先生が書き残した一・二行の言葉の末に、某某留字とあった。この〈留字〉（書置）という言葉はいいな、いつか使ってみようと思って五十年たった。学生向けの辞典に見られない言葉であるが、今日、この文章を〈志村和久留字〉。で結んでおきたい。